

聖霊降臨後第16主日(特定22)説教 2011/10/2
聖マタイ福音書第21章33節～43節
於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

「地震雷火事親父」という諺をお聞きになったことがあると思います。怖いもの、恐ろしく感じられるものを順番に上げたのだと思います。わたしたちも3月11日の東日本大震災以来、あまりにも凄まじいその惨劇を見聞きして、恐ろしいもののトップに地震が来ることには誰もが頷くであろうと思います。雷が広範囲に亘って被害を及ぼすことはあったとしても、停電になることくらいでしょうか。しかし、一旦大地震が起これば、その地域に住んでいるすべての人が被災から免れることはできません。

今回の大地震を経験して、わたしたちも自分にできることを通して、被災された方々と「いっしょに歩こう」としていますが、信仰生活の面でも、何故、このような苦しみに遭わなければならないのか、苦難の意味するところを自分の内面に向かって問いかけ、どのように受け止め向き合っていったら良いか、そのことを通して、信仰を深めていくことが大事な課題だと思います。

さて、話を始めに戻しますが、この諺の4番目に、どうして「親父」というのが出てくるのだろうか、それを疑問に思う人たちがいたようです。何故ならば他の事柄は自然災害なのに、火事の場合は自然災害でない場合もありますが、災害であることには違いありません。それらに比べて「親父」というのは、雷を落とされたとしても災害とは言えません。災難であるかもしれませんが。だから、異質なものがこのリストに上げられていると感じたのでしょ。

そこで、気象庁などでは、この「親父」というのは、元々は「大山嵐(おおやまじ)」と呼ぶ台風のことだったという説が、昔から唱えられていたようです。「おおやまじ」がいつの間にか、「おやじ」に詰まり、父親を意味する「親父」に転化したというのです。台風であれば、それによって先日のように大きな自然災害が起こる場合もあるわけですから、このリストの性格の整合性が整うことになり、納得がいくことになります。

この説に信憑性があるかないか、わたしにはよく分かりませんが、語呂が良いし、昔の親父は確かにおっかないところがあったから、そこに収まるまでに何らかのいきさつがあったとしても、「親父」に定着していったのでしょうか。

一昔か二昔前には、子どもにとって友達のような父親であること、母親であることが、素敵な家族であるかのように言われていた時代があったと思います。何でも話が出来て、物わかりが良くて、一緒に遊びに出かけて、明るいホームドラマのような家庭が、理想的な家族の姿のように思われて、親も子どももそれを良しとしていた時代がありました。

確かに、家庭内暴力とか虐待が頻繁に起こって、家庭が成り立たなくなり崩壊するよりは、家族の絆が保たれ、家庭が温かく、明日を生きていく力の源としての機能が発揮されるならば、それに越したことはないでしょう。しかし、一見、理想的とも思われる家庭の姿を追い求める中から、積み木崩しのような家庭崩壊が起こって来た、或いは虐待が大問題として浮かび上がって来たのではないのでしょうか。それはどうしてなのでしょう。

その理由の1つは、家庭に芯がなくなったからではないかと思います。中心となる心棒が見失われた結果ではないのでしょうか。昔は父親は大黒柱として一家を支えることが期待されたし、実際に支えて来たと思います。経済的な意味ばかりではなく、精神的な意味でも家庭のバックボーンとしての働きを担って来た。そこにある種の権威があった。家族から権威が認められて来た。それがおっかない親父の姿として現れていたのだと思います。

権威というと、そこにはいかめしさが伴うような、或いは周りを威圧するような、近付き難いという印象をもって受け留められるかもしれません。しかし、本来の権威というのは、自ずとそのもとに服していくような力として作用を及ぼすものです。

あの人はその道の権威だと目される人がいます。その専門領域ではほかの人の追従を許さないような、人から抜きん出て優れていると認められる人です。専門領域の知識や技術において最高の人と評価され、その人の専門に関する発言には誰もが耳を傾ける。重く受け止められるわけです。そこには真理に基づいた見解が表明されるからです。そして権威ある発言には自発的な服従を促す力が潜んでいます。

その力は、暴力や脅しによって強制的に同意や服従を求める権力とは全く別物です。区別されなければなりません。今、虐待が社会問題となるまで広がって来ているのは、親が権威をもって子どもに接するのではなくて、親の権力だけで無理矢理に子どもを従わせようとするところから生じてくるのではないのでしょうか。

かつては親父に権威があった。それが失われて来た。封建的な社会が過去のものとなり、民主的な社会に生まれ変わったこと自体は、評価すべきことだと思います。しかし、そこに新しい家庭像が築き上げられたのでしょうか。バックボーンも見失って、何処かに消え去ってしまったように思えます。日本の古い精神を賛美したり、それを取り戻せと言っているではありません。親父でなくても良いのです。しかし、家族のみんながそれに喜んで服していける、そのような権威の下で納得して家庭が1つになっていく、その絆を取り戻すことが、今、起きている様々な問題に根本から向かって行くためには必要なことではないのでしょうか。

皆さんの中の親父である方は、ご家庭に於いてどんな権威があるのでしょうか。或いは親父でなくても、家庭を中心になって支えている方は、どんな権威によってその力を発揮しているのでしょうか。

自分の父親でなくても、例えば職人の親方のことを「親父さん」と呼ぶようなことがあります。この呼び方には親しみが込められていると思いますが、親方に対する敬意と慕っていく心が溢れ出ているように感じられます。一方では、職人は親方の厳しい指導に恐れを感じることもあるでしょう。しかし他方、その厳しさの中に愛情と期待が含まれていることが分かるからこそ、「親父さん」と呼ぶことができるのです。「地震雷火事親父」という諺の「親父」も、おっかない存在というだけではなく、同時に、そこには親父の家族に対する愛と責任、そして家族からの敬愛の念も含まれているのではないか。権威というのは、そのように真理と愛に裏付けられたものであると思います。

ながながと、権威について申し述べて来ましたが、それは先週も申しましたように、マタイ21章ではイエスさまの権威について取り上げられているからです。

イエスさまはロバの子に乗ってエルサレムに入城し、神殿の境内で商売をしていた商人の台をひっくり返すという厳しい行動に出ました。そしてそこで民衆に教えを語ったのですが、それを見ていたユダヤ人の指導者たちは、イエスさまを詰問しました。一体、何の権威でこのようなことをするのかと返答を迫ったのです。イエスさまはその間に直には答えず、「ヨハネの洗礼はどこからものか」と問い返しています。「分からない」と答えるユダヤ人指導者たちに、「わたしも言うまい」と言って答えをなさいませんでした。

それに続くのが、先週、今週、そして来週も続けて読む3つのたとえ話です。従って、このたとえからは、イエスさまの権威の由来、それが何処から来たのか、どのようなものかについて、何らかの関わりを読み取ることができるのではないかと思います。

今日の箇所は、「ぶどう園と農夫のたとえ」と呼ばれていますが、物語自体は分かり易いものです。

ぶどう園の主人がぶどう園を農夫たちに貸して旅に出ます。収穫の時期になったので、僕たちを遣わして収穫を取り立てようとしたのですが、農夫たちは僕たちを袋だたきにし、或いは殺してしまいました。次に送られた僕たちも同じ目に遭わされました。そこで主人は自分の息子なら敬ってくれるだろうと考えて、息子を送ります。ところが農夫たちは跡取り息子を殺してしまえば、財産は自分たちのものになると示し合わせて、息子を殺してしまった、という物語です。大変、乱暴な話です。乱暴な話ですが、それがわたしたち人間の現実の姿であることをイエスさまは指摘されているのです。

イエスさまの権威は、父なる神さまから遣わされた権威です。父と一体であるところから来る権威です。その権威を暴力でもって抹殺しようと図るのです。そして権威のない権力でもってこの世に支配権を樹立しようと試みるのです。しかし、そこに起こることは何でしょうか。虐待です。

今日の旧約日課は、「主は裁きをまっておられたのに/見よ、流血。/正義を待っておられたのに/見よ、叫喚」と言って、秩序が失われた人間生活の中で起きている事柄は神さまの期待に反するものであることを指摘しています(イザヤ5:7)。そうならざるを得ないの

です。そこでは幸福な人間生活は失われ、苦しみ叫ぶ声が溢れ返るのです。真理と愛に裏打ちされた権威が欠如しているからです。

彼らが求めているものは、財産を自分のものにしようという自己の利益を追求することだけです。自己中心的な考え方に基づいた自己実現です。そのことに目が眩んで、恐れなければならない権威を見失うのです。

旧約聖書は、預言者の言葉を通して繰り返し繰り返し「神に帰れ」と人々に呼びかけました。その呼びかけを無視し応じようとしなかった人々に対し、神さまは怒りをもって臨むこともありました。しかし、神さまのその怒りは、人間を激しく憎み嫌うことによる怒りではなかったと思います。人間をこよなく愛するが故の怒りであったのではないのでしょうか。

その人間に対する愛の先に、神さまは、今度は怒りではなく、独り子をお遣わしになって愛を貫徹されました。脅しと恐れによって人を服従させるのではなく、愛に根ざした真理を啓示されることで、人が自ら進んで従っていくことのできる道を備えてくださったのです。この権威に服するとき、わたしたちの生活は、バックボーンがしっかりと据えられたものとなるのではないのでしょうか。